

一節 = 「原始」と「古代」

◇「縄文時代」と「弥生時代」◇

平成23年(2011年)11月、沖縄県石垣島の洞穴から出土した人骨の一部が、2万4千年前のものと確認された。

日本人の原型は、三大人種区分の一つ、モンゴロイドと呼ばれる類モンゴル人種群だ。黄褐色の皮膚と黒褐色の髪が特徴だ。その後、紀元前3世紀以降に渡来した新モンゴロイドとの混血を繰り返して、現在の日本人が形成された。

日本列島は今から約1万年前、海面の上昇で大陸から切り離されて島国になった。人々は土器を使うようになっていた。土器の多くが縄を巻きつけて作られたため、縄目の模様がついたことから縄文土器と呼ばれるようになった。

紀元前3世紀頃までの約8千年間を「縄文時代」という。

それ以前は旧石器時代だ。人は、狩猟、漁、植物の採取で生活し、竪穴式住居で定住生活を始めた。

今も「縄文時代」の貝塚(古代人が食べた貝の殻の層)が数多く残っている。

紀元前3世紀から紀元3世紀頃までの約600年間は「弥生時代」。

大陸や朝鮮半島から人々が移り住み、九州北部に稲作や、鉄や青銅などの金属器が伝わった。20戸〜30戸の集落が現れ、新しい生活と文化が始まった。

しかし、農耕社会の成立によって、人々の間に貧富の差が生じるようになり、支配者が出現した。

その頃の飾りの少ない素焼きの土器が明治17年(1884年)に東京都文京区弥生の遺跡から発見された。そのため、「土器」と「時代」に、「弥生」の名前が付いた。

◇「邪馬台国」◇

やがて、各地に大きな集落が生まれ、それぞれが小国として形成された。

中国の歴史書「漢書」には、「倭人(当時の中国では、日本人のことを倭人と呼んでいた)の社会は百余国に分かれていた」と書かれている。

西暦57年に、現在の福岡市付近にあった「奴国」の王者の使者が後漢の都、洛陽に赴いたと言われる。その時、光武帝から授かかったと考えられる「金印」が福岡市志賀島で発見された。「金印」には「漢倭奴国王」の5つの文字が刻まれている。

中国は220年に後漢が滅び、魏・呉・蜀の三国時代を迎えた。

この時代に書かれた歴史書「三国志」の「魏志倭人伝」には、『「倭国」(日本)では 2 世紀の終わり頃、30 ほどの小国が争いを続けていた』とある。

最も強大だった「邪馬台国」が諸国の争乱を収めた。共同の王として支配したのが女王「卑弥呼」だ。239 年に、その「卑弥呼」が魏の皇帝に送った使者は「親魏倭王」の称号と「100 枚の銅鏡」を贈られた。

「邪馬台国」の所在地について、近畿地方の大和(今の奈良県)とする「畿内(近畿)説」と、九州北部とする「九州説」の二つに分かれ、論争が続いている。

キーワードが、「三角縁神獣鏡」だ。「三角縁神獣鏡」とは、直径 20 セン～30 センの大型の銅で作られた鏡。神と不思議な獣の文様を持ち、縁の断面が三角形をしている。

平成 10 年(1998 年)1 月、「三角縁神獣鏡」が奈良県天理市の黒塚古墳から 32 枚発見され、論争に一石を投じた。



三角縁神獣鏡

「畿内説」の根拠は、「卑弥呼が魏の皇帝からもらった銅鏡は三角縁神獣鏡」という考えから、「邪馬台国が近畿にあった」という主張や、古墳時代の始まりである箸墓古墳(奈良県桜井市)が「卑弥呼」の死亡時期と重なる 240 年～260 年に築造された、という研究などだ。

一方、「九州説」は、「卑弥呼がもらった銅鏡は、三角縁神獣鏡とは別のものだから、三角縁神獣鏡が畿内説を裏付けることにはならない」という。

「三角縁神獣鏡」はこれまで、京都府、大阪府などの近畿を中心に九州から東北地方にかけて、約 500 枚が出土した。

また、「卑弥呼がもらった銅鏡は 100 枚だけ。それ以上の三角縁神獣鏡は日本で製造されたもの」という「九州説」に対して、「畿内説」は「当時、貴重だった銅を使って何百枚もの鏡を作るのは、邪馬台国以外に考えられない」という。

なお、中国では、「三角縁神獣鏡」はまだ 1 枚も発見されていない。

2009 年には、奈良県桜井市の纏向遺跡で 3 世紀前半の大型建物跡が見つかり、「卑弥呼の宮殿ではないか」と話題になった。

◇「大和政権」と「古墳時代」◇

鉄製の農具や武器の生産が盛んになり、稲の収穫も増え、豊かになったそれぞれの国は、互いに争い、次第に強い国によって統一された。

3世紀から4世紀にかけて、大和地方(今の奈良県)とその周辺の有力な支配者である豪族たちは「大和政権」をつくった。

「大和政権」は、「倭国」(日本)の「大王(おきみ)」を天皇として擁立し、4世紀後半から5世紀までに、関東地方から九州中部までほとんどの豪族を従えた。わが国最初の統一政権が大和朝廷だ。

中国・朝鮮との外交は、大和朝廷が中心になって行った。

5世紀には中国の漢字が使われ、漢字の「音」で日本人の名や地名を書き表した。

6世紀には、中国・朝鮮半島を経て、儒教の書物や仏教の教典、さらに仏像が伝えられた。

朝鮮半島では高句麗・百済・新羅が勢力を持ち、中国では581年に隋が支配した。

4世紀初頭に作られた大きな墓を古墳という。地方の豪族ら有力者をまつる墓だったが、次第に王の権威や勢力の強さを示すものとなった。

中国や朝鮮と同じ円墳《土を半球形にまるく盛った墓》や方墳《土を四角に盛った墓》もあるが、西日本を中心に大規模な前方後円墳《前が四角形で、後がまるい墓》が多く作られた。

3世紀後半から7世紀までの約400年を「古墳時代」と呼ぶ。

◇「飛鳥時代」と「聖徳太子」◇

仏教は、「飛鳥(今の奈良県・奈良盆地)」にあった朝廷の保護を受けて発展し、飛鳥文化として栄えた。6世紀末から7世紀前半までを「飛鳥時代」と呼ぶ。

「大和政権」をつくった豪族たちは土地や農民の支配をめぐる激しく対立し、政情不安が高まった。

最初の女帝として即位した推古天皇は592年、甥の「聖徳太子」(574年～622年)に、国政の改革を担当させた。「聖徳太子」は、中央の豪族の主導権争いを鎮めるため、天皇中心の中央集権国家を目指した政治改革を行った。

「聖徳太子」は、603年に「冠位十二階の制」を定め、604年に「十七条憲法」を制定した。

「冠位十二階の制」は、朝廷内の地位をはっきりさせるため、「徳・仁・礼・信・義・智」の六つを、それぞれ大と小に分けて「十二階」とし、冠の色を「紫、青、赤、黄、白、黒」と濃淡で区別した。各人の才能や功績に応じて冠位が決められ、後に、中央・地方の役人に与えられた位階制度の起源となった。

「和を以て貴しとなし」に始まる「十七条憲法」は、仏教を敬うこと、国家の中心としての天皇に服従すること、を強調した。

中国の「隋」と国交を開き、607年には^{ていしん}廷臣（^{ちやうてい}朝廷に仕える者）・^{おののいも}小野妹子を遣隋使として中国に派遣し、中国文化を導入した。多くの^{りゅうがくせい}留学生や^{がくもんそう}学問僧が同行し、後の「大化の改新」などの改革に大きな役割を果たした。

現存する世界最古の木造建築物である^{ほうりゅうじ}法隆寺（^{いかるがでら}斑鳩寺）は607年、「聖徳太子」によって創建された。

◇「大化の改新」と「大宝律令」◇

中国では618年に隋が滅び、唐が興った。日本では、「聖徳太子」の死後、豪族たちの争いが一層激しくなり、強力な国家を建設しようとする動きが強まった。

645年に、中臣鎌子（古代の氏族。後の藤原鎌足）や中大兄皇子（後の天智天皇）は、「土地は国家の所有とする」、「戸籍を作り、一定の土地を授ける班田収授法を定める」、「地方の行政区画を定める」など、中央集権国家のあり方を示した。この年、初めて「元号」を採用し、「大化」とした。孝徳天皇の下で、天皇中心の政治体制を目指した一連の改革を「大化の改新」という。

文武天皇の701年（大宝元年）に、班田収授法などを盛り込んだ政治と行政の新しい仕組みを定めた「大宝律令」という法律が制定され、国家の形を整えた。「律令」の「律」は現在の刑法、「令」は行政法、民法、商法に当たる。

708年（和同元年）に、日本で最初の流通貨幣である「和同開珎」が鑄造・発行された。直径24ミリの前後の円形で、中央に一边が約7ミリの正方形の穴が開いている。表面に、時計回りに「和同開珎」と書かれている。銀銭が発行された後、銅銭の鑄造が始まった。



和同開珎

なお、「日本」を名乗るようになったのは、「大宝律令」（701年）からと言われている。しかし、2011年に、中国・西安で見つかった678年作の墓誌（故人の事績を刻んで墓に収めた石板）に「日本」という文字があることが明らかにされた。これが確認されれば、670年代に「倭国」から「日本」に代わったことになる。

◇「奈良時代」◇

8世紀に入ると、「遣唐使」によって「唐」の進んだ文化がもたらされ、710年に朝廷は

「唐」の都、長安(現在の西安)にならって、大規模な都を築いた。都を、藤原京(現在の奈良県橿原市付近)から平城京(現在の奈良市から大和郡山市周辺)に移した。

784年までが「奈良時代」。

聖武天皇(在位724年～749年)の招きで日本に来た「唐」の高僧・鑑真(688年～763年)らが、戒律の普及や仏教の発展に大きく貢献した。「鑑真」は日本への渡航に何度も失敗したが、日本に戒律を伝える意志を貫き通した。失明の身となり、教典と仏像を携えて日本に来たのは、67歳の時だった。

「鑑真」は、奈良の唐招提寺を創建した。

「奈良時代」に栄えた高度な貴族文化は、聖武天皇時代の元号から「天平文化」という。この時期に、歴史書「古事記」、「日本書紀」や地誌の書「風土記」などが作られた。

「奈良時代」までの和歌・約4,650首を集めたのが「万葉集」だ。

◇「遣隋使」と「遣唐使」◇

朝廷が中国文化を輸入するため、7～9世紀に、日本から「隋」や「唐」に公式の使節を派遣したのが「遣隋使」、「遣唐使」だ。留学生や留学僧など、多い時は約500人も派遣された。

「隋」は中国大陸を統一した大国。607年の「遣隋使」が第一回で、小野妹子(飛鳥時代の政治家、外交家)が「聖徳太子」から「隋」の王様宛の手紙を預かって、海を渡った。

「隋」が619年に滅びたため、「遣隋使」は614年が最後となり、いったん休止した。

その後、「唐」が建ったので、「遣唐使」が630年から始まった。

「遣唐使」は、約260年間、続いたが、「唐」の衰退や「航海の危険」を理由に、894年(寛平6年)に廃止された。

◇「平安時代」と「摂関政治」◇

「奈良時代」に「天平文化」が栄えたものの、皇族や貴族の勢力争いで政治が乱れた。桓武天皇は政治を立て直すため、794年(延暦13年)に今の京都に平安京を造営し、そこに都を移した。

794年からの「平安時代」は約400年間続いた。

仏教界にも新しい動きが起こり、唐に渡った僧侶、最澄と空海は帰国後、天台宗と真言宗を開いた。

9世紀に入ると、藤原鎌足の子孫である「藤原氏」一族が天皇の権威と結びついて、勢力を伸ばした。

当時の貴族社会では、天皇の外戚(母方の親類)であることが重要視された。藤原氏は代々、天皇の外戚となり、天皇が幼い時は摂政として、天皇が成人すると関白(天皇を補佐する重職)として、政治の実権を握った。

10世紀後半から11世紀頃、藤原氏が天皇に代わって行われた政治を「摂関政治」という。

◇「国風文化」◇

10 世紀になると、新しい日本風の文化が興った。

豊かな経済力を持つ上流貴族と僧侶たちによって、唐風の文化を日本人の生活に合わせるように工夫され、「唐様から和様への転換」を特色とする「国風文化」が生まれた。

奈良時代から使われた「万葉がな」をもとにして、「かな文字」が作られ、11 世紀には「漢字」と「かな」で書き表す日本独特の文章が生まれ、漢文学とともに、和歌、随筆、物語、日記などが発達した。

紀貫之らによって、最初の勅撰和歌集（天皇の命令で選ばれた和歌を編纂）である「古今和歌集」が編集された。

「かな文学」は主に女性によって書かれ、11 世紀初めには、紫式部の長編小説『源氏物語』や清少納言の随筆『枕草子』などのすぐれた作品が生まれた。

紀貫之の「土佐日記」は女性が書いたようにまとめた最初の「かな文字」日記だ。

◇「源氏」と「平氏」◇

10 世紀の中頃になると、朝廷の力が衰え始め、各地で、豪族を中心に武力を持った集団が勢力を強めた。その中で強力だったのが「源氏」（「源」の姓を有する氏族の総称）と「平氏」（「平」の姓を有する氏族の総称）だった。

平将門が下総（今の千葉県北部と茨城県の一部）を拠点に関東の大半を征服した。

一方、源満仲が摂津（今の大阪府と兵庫県の一部）に土着していたが、その子、頼信が千葉県南部の房総半島に広がった乱を鎮圧し、「源氏」の東国進出のきっかけをつくった。

11 世紀中頃、藤原氏との関係が薄い天皇が位につくと、天皇に政治の実権を取り戻そうとする動きが強まった。

後三条天皇の後を継いだ白河天皇（在位＝1072 年～1086 年）は、1086 年に幼い堀河天皇に譲位したが、自ら上皇（天皇の位を譲った後の呼び名）として、政治の実権を握って、力を発揮した。上皇による政治が 100 年余続いた。

12 世紀の中頃になると、「源氏」と「平氏」は、皇室や藤原氏の争いに加わり、京都で勝った平清盛が武士として初めて政治の実権を握り、勢力を飛躍的に伸ばした。

二節 = 「中世」

◇「鎌倉時代」と「武家政治」◇

「平氏」による政権は、長くは続かなかった。

「政治は少しも変わらない」という不満が広がり、「源頼朝」(1147年～1199年)や「源義経」らが「平氏」打倒に立ち上がった。

「頼朝」の支配権は全国に及び、1192年(建久3年)、朝廷から征夷大將軍(武士の統率者として最高の地位)に任命された。鎌倉に「武家政治」による「鎌倉幕府」が開かれ、「鎌倉時代」に入った。

(「鎌倉時代」が始まった年を、「語呂合わせ」で「いいくに(1192)」作ろう「鎌倉幕府」、と覚える)。

朝廷や譲位した太上天皇などの政治力は依然強かったが、公武(朝廷と幕府)の二元的な支配体制の中で、武士の支配力は次第に強まり、「鎌倉時代」は約140年間続いた。

「鎌倉幕府」は、將軍と御家人(將軍に仕える者)が土地を仲立ちとして主従関係を結ぶ封建制度に基づく政権だった。

「頼朝」の死後、子の「頼家」、「実朝」の時代になり、主導権争いが激しさを増す中、「頼朝」の妻・政子の父、「北条時政」が事実上の実権を握った。執権政治と呼び、北条氏一族が幕府の政権を世襲した。

この間、中国の宋と貿易が盛んに行われ、日本からは金、木材、米、漆器などを輸出し、大陸からは宋銭や陶磁器、香料などを輸入した。

13世紀初め、モンゴル(蒙古)高原のチンギスカン(成吉思汗)が中央アジアから南ロシアまでを征服。後継者が大帝国を建設し、中国を支配し、国の名を「元」(1271年～1368年)と定めた。

「元」の大軍は、1274年(文永11年)と1281年(弘安4年)に九州北部に上陸し迫ったが、九州地方の武士が迎え討ち、さらに暴風雨などのため敗退した。

元の軍の襲来を「元寇」(蒙古襲来)と呼ぶ。

鎌倉、室町、安土桃山、江戸の各時代は、幕府の権力者である將軍が一貫して天皇から政治の大権を預かる形で政治が行われた。天皇に政治の実権が返還される1867年(慶応3年)の大政奉還までの約670年余、「武家政治」が続いた。

◇「鎌倉文化」◇

「鎌倉時代」には、武士や庶民の素朴で質実な気風を反映した文化が生み出された。

一方で、「鎌倉文化」は大陸から来た僧侶や商人によって「宋」や「元」の影響を受けた。特に仏教は、厳しい戒律などを求めた天台宗や真言宗などと異なり、庶民を対象とする宗派が広がりを見せ、法然が浄土宗(「南無阿弥陀仏」という念仏を唱えれば、死後、極楽浄土へ往生できると説く)を、親鸞が浄土真宗を、日蓮が日蓮宗を、栄西が臨済宗

を、道元が曹洞宗を、それぞれ開いた。

文学では、西行の和歌集「山家集」、藤原定家らが編集した「新古今和歌集」、鴨長明の随筆「方丈記」、軍記物「平家物語」(作者不詳)、吉田兼好の随筆「徒然草」などが生まれた。

彫刻では、東大寺南大門の金剛力士像(仏師・運慶と快慶の作)など、写実的で力強い作品が作られた。陶器が「宋」や「元」から伝わった。

◇「南北朝時代」◇

鎌倉幕府の力が徐々に衰え始めると、幕府の有力な御家人(武将)だった「足利尊氏」(1305年～1358年)が幕府に背くなど、権力争いは複雑な様相を見せた。そして、武将「新田義貞」が鎌倉幕府の権力を握っていた「北条高時」らを滅ぼし、1333年(元弘3年)、鎌倉幕府は幕を閉じた。

この時、後醍醐天皇(在位=1318年～1339年)は京都に帰り、院政を排して、天皇自らが政治を行う天皇親政を始めた。これを「建武の新政」という。

これに不満を持った「足利尊氏」は兵を挙げ、京都を制圧した。さらに、光明天皇を擁立して、1338年には自ら征夷大將軍になり「室町幕府」を開いた。これが「北朝」である。

一方、京都を逃れた後醍醐天皇は吉野(奈良県南部)の山中に立てこもり、正統の皇位を主張した。これを「南朝」という。

「南朝」と「北朝」の争いは約60年間続いたが、「足利尊氏」の孫「足利義満」が將軍になる頃には次第に収まった。この時代が「南北朝時代」だ。

中国では、1368年に朱元璋(洪武帝)が「元」の支配を抑え、漢民族の王朝である「明」(1368年～1644年)を建国した。

朝鮮半島では、李成桂が1392年に高麗を倒し、李氏朝鮮(「李朝」)。1392年～1910年)を建てた。

◇「室町時代」◇

「足利尊氏」の孫である第3代將軍「足利義満」が南北朝の内乱を収め、1392年(明德3年)に「室町幕府」を築いた。

第15代將軍「足利義昭」が武将「織田信長」と不和になり、京都を追われるまでの約180年間が「室町時代」だ。

「義満」が京都・室町の邸宅で政治を行ったことから、「室町幕府」と呼ばれる。

「室町時代」の後半になると、將軍の力が弱くなり、後継ぎをめぐる争いをきっかけに、1467年(応仁元年)、「応仁の乱」が起こり、実力のある者が上の者にとって代わる「下剋上」の世の中になった。

広い領地を持つ各地の大名(殿様)が、それぞれ国をつくってその支配者になる戦国時代が約100年続いた。

沖縄(沖縄県)では、1429年(永享元年)、尚巴志が「琉球王国」を築いた。

「室町時代」の文化は、貴族の文化と庶民の文化、大陸文化と伝統文化など、文化の融合が進み、民族的文化として成熟していった。

「能」、「狂言」、「華道(生け花)」、「茶道(茶の湯)」は、この時代に伝統文化としての基盤を築いた。

能役者・能作者である「観阿弥」・「世阿弥」父子は、第3代将軍「義満」の保護を受け、「能」を極めて芸術性の高い歌舞劇として発展させた。

「義満」が別荘として京都市北山に造ったのが金閣寺(鹿苑寺)だ。

三層のうち上二層の周囲に金箔を張った楼閣建築で、伝統的な寝殿造風と禅宗寺院風の折衷建築として有名だ。創建以来の金閣(舍利殿)は1950年(昭和25年)に放火で焼失し、5年後の1955年に再建された。



三節 = 「近世」

◇「安土・桃山時代」◇

1542 年(天文12 年)にポルトガル人を乗せた中国船が九州の種子島に漂着し、鉄砲・火薬が入ってきた。ポルトガル人やスペイン人を南蛮人と呼び南蛮貿易が盛んに行われた。

16 世紀後半になると、各地に天下統一を目指す戦国大名が現れた。

「織田信長」(1534 年～1582 年)は1560 年(永禄3 年)に「今川義元」を「桶狭間(現在の愛知県)の戦」で破り、1573 年(天正元年)には「足利義昭」を追放して「室町幕府」を倒した。「信長」は安土(現在の滋賀県)に安土城を築いて勢力を広げ、京都から近畿、東海、北陸地方を支配した。しかし、1582 年(天正10 年)、京都の本能寺で、家臣の「明智光秀」に殺された。これを「本能寺の変」という。

この間、「豊臣秀吉」(1537 年～1598 年)は、「織田信長」に仕え、有力な武将に出世した。「本能寺の変」を知った「秀吉」は直ちに出兵、わずか13 日後に、「山崎(現在の京都府と大阪府の一部)の合戦」で「明智光秀」を討ち、天下統一の基礎を築いた。

「秀吉」は四国、九州を次々と勢力下に置き、1590 年(天正18 年)に小田原(神奈川県)の「北条氏政」を滅ぼし、「伊達政宗」ら東北地方の諸大名も服属させ、全国を統一した。

「秀吉」は全国統一のため「検地」と「刀狩」を行った。

「検地」は農民の田畑を測量すること。収穫できる米の量に換算した石高(一石は150kg)を定め、それによって、農民は税として自分の持ち分に応じた年貢(主に米=年貢米)を納めなければならない。また、大名は支配している石高に見合った軍役(軍事上の負担)を奉仕する体制が出来上がった。

「刀狩」は、農民と武士を分離し、農民から武器を没収し、一揆(農民が武器を使って支配者への反抗や抵抗のため行動すること)を防ぐのが目的だった。

全国統一を果たした「秀吉」は、キリスト教が国家体制の妨げになるとして大名らのキリスト教入信を許可制にし、宣教師を国外追放した。しかし、キリスト教弾圧は不徹底に終わった。

また、「秀吉」は、1592 年(文禄元年)と1597 年(慶長2 年)の2回、約30万人の大軍を朝鮮に派兵した。「秀吉」の病死で日本軍は撤兵したが、前後7 年に及ぶ日本軍の侵略は朝鮮の人々と国土に大きな爪痕を残した。「織田信長」と「豊臣秀吉」が政権を握っていた約25 年間(1573 年～1598 年)が「安土・桃山時代」だ。

長い戦乱が収まり、人々の間に活気があふれ、新鮮で豪華な「安土・桃山文化」が生まれた。それを象徴するのが安土城、大坂城(後に大阪城)、伏見城などの城だ。いずれも、重層の天守閣を持つ本丸をはじめ、天下統一の力を誇る雄大で華麗な城だ。

この時代に「茶道」が確立した。また、出雲(島根県)の「阿国」という女性が組織した歌舞団の芸が庶民の娯楽として親しまれ、後に「歌舞伎」として発展した。

◇「江戸時代」◇

東海地方に勢力を持ち、約250万石(1石は米・150kg)の領地を支配していた大名「徳川家康」(1542年～1616年)は「秀吉」の死後、一段と力を強めた。

1600年(慶長5年)に「関ヶ原(岐阜県)の戦い」で「石田三成」らを破り、全国の大名に従えた。1603年(慶長8年)には朝廷から征夷大將軍に任命され、江戸(現在の東京)に幕府を開き、徳川時代(「江戸時代」)が始まった。そして、1615年(元和元年)の「大坂夏の陣」で、大坂城の「豊臣氏」を滅ぼし全国を統一した。

その後、「徳川氏」が將軍の地位を受け継ぎ、1867年(慶応3年)に15代將軍「徳川慶喜」が政權を朝廷に返上する「大政奉還」まで約265年間、全国を支配した。

武士・將軍が政權を握る「武家政治」は「江戸時代」で終わりを告げた。

江戸幕府は幕藩体制だった。

武士による「幕府」と、幕府から領地を与えられた「藩(大名)」が土地と農民を統治し、「米」を「年貢」(税金)として徴収する体制のことで、封建社会でもあった。

人々の身分を「士農工商」(武士、農民、職工・職人、商人)に分ける厳しい身分制度を設け、少数の武士が多数の民衆を支配した。

この時期、「百姓一揆」や「打ち壊し」が多発した。

「百姓一揆」は、年貢や諸役などの重い負担に苦しむ農民が飢饉や凶作をきっかけに領主に抵抗する直接行動のこと。「百姓一揆」は、1787年(天明7年)に江戸、大坂(大阪)など30余の都市で起こるなど、江戸時代に3千件以上に上った。また、1782年(天明2年)の「天明の飢饉」や、1832～3年(天保3～4年)の「天保の飢饉」では、多数の餓死者が出た。

「打ち壊し」は市中の米問屋などが襲われ、倉庫が壊されること。

東南アジアへの貿易が盛んになると、「徳川家康」は海外渡航する船に「朱印状」という許可証を与え、西日本の大名や有力商人が朱印船貿易を行った。

1607年(慶長12年)に、「豊臣秀吉」の朝鮮出兵で途絶えていた朝鮮との国交を回復、朝鮮の使節が初めて来日した。長崎だけ中国船の貿易が行われた。

「徳川家康」は、キリスト教徒を一時的に黙認したが、約70万人にも達したキリシタン(キリスト教、カトリック教とその信者)の勢力増大を恐れて、1612年(慶長17年)にキリスト教を禁止する禁教令を出し、宣教師を追放したり、キリシタンを処刑したりした。

江戸幕府はキリスト教への恐怖心を強め、1639年(寛永16年)、ポルトガル船の来航を禁止し、鎖国令を出した。

以後、約200年、キリスト教の布教に関係がなかったオランダ、中国以外の外国との交渉を閉ざした。これが「鎖国」である。幕府は、「鎖国」で貿易の独占権を握っていた。

「琉球」は1609年(慶長14年)、薩摩(鹿児島県)の「島津家久」の軍に征服され、薩摩藩の支配下に入り、1879年(明治12年)に沖縄県となった。

◇「江戸文化」◇

江戸時代前期の「元禄」文化と、後期の「化政」文化を「江戸文化」という。

17世紀後半、徳川5代将軍「綱吉」の頃、政治の安定と豊かな経済力を背景に、華やかさを持った町人文化が、上方(大阪や京都の周辺)で栄えた。当時の元号から「元禄文化」という。

上下の身分秩序と礼節を説く朱子学と、最高道徳である「仁」を目指し、社会における人々の役割を説く儒学が重んじられた。

江戸前期は、風俗画「浮世絵」が庶民の間に大きな人気になった。

「絵画」では、「鈴木春信」が錦絵と呼ばれる多色刷の「浮世絵版画」を創作した。

「菱川師宣」は美人、役者、相撲などを「浮世絵」の版画にした。肉筆画の「見返り美人図」が有名だ。

「浮世絵」は黄金期を迎え、「喜多川歌麿」の美人画、「東洲斎写楽」の役者絵・相撲絵、「葛飾北斎」と「歌川広重」の風景画が好評を博した。

「浮世絵」はモネ、ゴッホなどヨーロッパ印象派の画家に強い影響を与えた。

元禄期の文学を代表するのが、「井原西鶴」、「松尾芭蕉」、「近松門左衛門」だ。

「西鶴」は、「好色一代男」、「日本永代蔵」など浮世草子と呼ばれる小説を完成させた。

「芭蕉」は連歌から芸術性の高い俳諧(俳句)を生み出し、多くの名句と「奥の細道」などの紀行文を残した。

「近松」は人形浄瑠璃や歌舞伎の「曾根崎心中」、「心中天網島」などで、義理と人情の板ばさみから悲劇の死を遂げる男女の姿などを書いた。

18世紀の末には、文化の中心は上方から江戸に移り、19世紀初めの「文化・文政」の頃になると、江戸の町人や庶民の文化が栄えた。これを「化政文化」と呼ぶ。

庶民には洒落や皮肉が喜ばれ、世の中を風刺した川柳や狂歌が流行した。

俳諧では京都の「与謝蕪村」、信濃(現在の長野県)の「小林一茶」らが活躍した。

この頃、儒教や仏教の考えにとらわれない「国学」が発達し、「本居宣長」は「古事記伝」を著し、日本古来の精神を説いた。

一方で、オランダ語をもとにして西洋の科学や文化を研究する「蘭学」も盛んになった。

◇「幕末」と「王政復古」◇

江戸幕府(徳川幕府)の末期を「幕末」という。

19世紀後半、産業革命によって資本主義体制を整えた欧米列強は、アジアへの侵略を開始した。アメリカは1853年(嘉永6年)、ペリー・東インド艦隊司令長官が軍艦(黒船)4隻を率いて浦賀(神奈川県横須賀市)沖に現れ、日本に開国を迫った。

翌1854年(安政元年)、ペリーは軍艦7隻とともに再び来航し、力を背景に江戸幕府と日米和親条約を結んだ。日本は、イギリス、ロシア、オランダとも和親条約を結び、200年以上にわたった日本の「鎖国」は崩れた。

幕府はやむなく、1858年(安政5年)に自由貿易などを定めた日米修好通商条約に調印。関税の税率決定権が日本にない不平等条約だった。

その後、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと同じような通商条約を締結した。

外国に対する開国は、日本の封建社会に致命的な影響を与えた。同時に、物価上昇など、経済の混乱を来し、庶民の生活は困窮を極めた。農民や町人の「百姓一揆」、「打ち壊し」が多発し、そうした社会を背景に、江戸幕府を倒そうとする「討幕(倒幕)運動」が強まった。

政治情勢を安定させようとする幕府は、「朝廷(天皇=公)」と「幕府(武家政権)」が協力する「公武合体」運動を進めたが、その中で「尊皇攘夷」を掲げる長州藩(山口県)の動きが活発になった。

《「尊皇攘夷」=天皇の絶対的権威を認めて、皇室を崇拝する思想が「尊皇」。

開国に反対して、外国人を入国させず、外国を排撃する考え方が「攘夷」。外圧が増大するにつれて、二つが結びついた「尊皇攘夷」論が広がった。》

だが、「攘夷」が困難だと悟った武士たちは、逆に欧米から学ぶ姿勢に転じた。

そして、幕府を倒して新しい政治の実現を望んだ。

「高杉晋作」、「桂小五郎」らの藩士を中心とした長州藩は、朝廷と幕府の双方につながるの深い薩摩藩(鹿児島県)と軍事同盟の密約・「薩長連合」を結んで「討幕」の動きを強めた。

薩摩・長州の両藩が武力による「討幕」を決意したため、土佐藩(高知県)の「坂本龍馬」(1835年~1867年)らは1867年(慶応3年)、徳川15代将軍「慶喜」に政権を朝廷に返上するよう申し出た。

「徳川慶喜」はこれを受け入れて、政権を返上する「大政奉還」の文書を朝廷に提出した。

幕府側の巻き返しの動きもあったが、討幕派は政変を決行した。

朝廷による「王政復古」(武家政治を廃止し、天皇による政治に戻す)を宣言し、天皇を中心とする明治新政府を樹立した。

四節 = 「近代」と「現代」

◇「明治維新」◇

「幕末」から明治初年にかけての政治体制の変更を「明治維新」という。

日本は、封建国家から近代市民国家へ生まれ変わった。

一方で、近代天皇制がスタートしたものの、日本は激動の時代に突入した。

1868年(明治元年)1月、幕府側は「徳川慶喜」を擁して新政府に反撃したが敗れ、「慶喜」は京都から江戸に逃れた。新政府は「慶喜」を朝廷の敵とみなして、江戸征伐の軍を出し4月に幕府があった江戸を制圧した。

その一カ月前には、天皇がすべての神に誓約する「五箇条の誓文」を公布し、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」、「旧来の陋習(悪い習慣)を破り、、、」など、明治新政府の五つの基本政策を示した。

そして、太政官を中心とした政府組織を作り、7月に「江戸」を「東京」と改め、9月には元号を「明治」とし、「一代の天皇に一つの元号を用いる」一世一元の制度を整えた。

翌明治2年(1869年)には東京遷都を果たし、首都を京都から東京に移した。

明治政府は、1869年(明治2年)6月に「版籍奉還」(各地の大名が領地・領民を天皇に返還すること)を命じ、1871年(明治4年)7月には「廃藩置県」(全国の藩を廃止して、府県制度に改める)を断行、中央集権を実現した。

明治政府の基礎は固まったが、事実上、薩摩、長州、土佐、肥前(佐賀県と長崎県の一部)の四つの藩(薩・長・土・肥)の出身者が政府の実権を握ったため、「藩閥政治」と呼ばれた。

政府は欧米の先進資本主義国に対抗するため、富国強兵を目指し、近代産業の育成を図りながら、新しい制度の確立を目指した。

1872年(明治5年)1月に、満20歳になった男子を強制的に兵士とする徴兵令を公布し、軍事的基礎を築いた。

また、欧米の文化を積極的に取り入れ、官営の郵便制度が発足し、1872年(明治5年)12月に太陽暦を採用し、一日を24時間とし、日曜日休日制が実施され、日刊新聞や雑誌が東京を中心に発行された。

生活や文化が近代化された風潮を「文明開化」と呼び、洋服や、髪を短く切りそろえた「ざんぎり頭」が広がった。「ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする」と歌われた。

明治政府が朝鮮に国交樹立を求めるなか、1873年(明治6年)、薩摩藩士「西郷隆盛」や土佐の政治家「板垣退助」らが武力を背景に征韓論を唱えたが反対にあい、「西郷」らは下野した。

2年後の1875年(明治8年)、日本軍艦が上陸しようとして衝突した江華島事件を機に、政府は不平等条約である日朝修好条約を押し付け、朝鮮を開国させた。

明治政府は領土の確定に努め、1875年(明治8年)にロシアと樺太・千島交換条約を結び、樺太の権利をロシアに譲り、日本が千島全島を領有した。

イギリス、アメリカとの間で帰属が明確でなかった小笠原諸島を日本の領有とした。

1879年(明治12年)に琉球藩を廃止して沖縄県を設置したことで、琉球王国は滅亡した。

「明治維新」後の改革で打撃を受けた士族は各地で反乱を起こした。

1877年には、鹿児島県で「西郷隆盛」を指導者とする最大の反乱「西南の役(西南戦争)」が起きたが、政府は約半年後に鎮定し、これを最後に、明治政府に対する反乱は収まった。

◇「大日本帝国憲法」と「議会」◇

1874年(明治7年)、郷里の土佐(高知県)に帰った「板垣退助」らは「自由」と「政治への参加」を求める自由民権運動を起こした。イギリスやフランスの民権思想の影響を受けた運動は、政府が弾圧を強めるなか、国会の開設を認めさせた。

「板垣退助」は1881年(明治14年)に自由党を結成、翌年には「大隈重信」がイギリス風の議会政治を掲げる立憲改進黨を結成した。

1882年(明治15年)に、中央銀行である日本銀行が設立された。

1885年(明治18年)には太政官制を廃止して内閣制度が誕生し、「伊藤博文」が初代の内閣総理大臣(首相)になった。

1889年(明治22年)2月11日には、天皇が定めた欽定憲法である「大日本帝国憲法(明治憲法)」が公布された。天皇は「統治権」の総攬者(権力を一手に掌握している者)となり、帝国議会、内閣、裁判所は天皇の統治下に置かれた。陸海軍の統帥権(軍隊の最高指揮権)は天皇直属となった。

国民に厳しい制限はあったものの、言論、出版、集会、信教などの自由が認められた。

一方で、憲法公布の翌年には教育勅語が公布され、「忠君愛国」の道徳を基本とする国民教育が始まった。

帝国議会は、「貴族院」と「衆議院」の二院制で、「貴族院」は貴族と華族、さらに天皇が任命した議員から成り、「衆議院」は選挙で選ばれた議員で構成された。

第一回の衆議院議員の総選挙は1890年(明治23年)に行われた。

選挙人は「満25歳以上の男子で、直接国税15円以上の納税者」に限られたため、有権者は総人口の1%超に過ぎなかった。

この時の首相は「黒田清隆」。

日本はアジアで唯一、「憲法と議会」を持つ近代的立憲国家だった。

◇「日清戦争(中日甲午戦争)」と「日露戦争」◇

日本は「朝鮮」を勢力下に置こうとしたため、「朝鮮」を勢力範囲とみなしていた「清国」と対立した。

1894年(明治27年)、朝鮮国内で「減税と排日」を要求する農民の戦争(甲午農民戦争)

が^お起こり、朝鮮政府は「清国」に^{えんぐん}援軍を^{ようせい}要請。日本が「朝鮮」に^{しんにゅう}侵入したため「日清戦争(中日甲午戦争)」が始まった。日本が^{しょうり}勝利し、^{りょうこく}両国は1895年(明治28年)4月、山口^{けんしものせき}県下関で、「^{りょうとうはんとう}遼東半島、^{たいわん}台湾、^{ほうこしやう}澎湖諸島を日本に^{ゆず}譲る」などの^{しものせき}下関条約(馬関条約)を^{むす}結んだ。日本は、大陸侵略の一步を踏み出した。

だが、遼東半島を日本に^{かつじよう}割譲したことに^{はんぱつ}反発した「ロシア」は「フランス」、「ドイツ」を^{さそ}誘い、遼東半島を「清国」に^{へんかん}返還するよう日本に^{ようきゆう}要求した。これを「三国干渉」という。

対抗する^{たいこう}力がないと判断した日本は要求を受け入れ、返還に応じた。しかし、「ロシア」への^{てきい}敵意を増大させ、^{おうべいしよこく}欧米諸国に対抗できる^{ぐんじりよく}軍事力を^{そな}備える動きを強めた。

そして、「韓国」(^{かんこく}朝鮮は1897年に国号を大韓帝国「韓国」と改めた)や「満州」(^{ちゅうこく}中国の^{とうほくぶ}東北部)の^{しはいけん}支配権をめぐる、日本は「ロシア」と^{はげ}激しく^{たいりつ}対立、1904年(明治37年)に「日露戦争」が始まった。

翌年、「ロシア」の^{こんきよち}根拠地だった^{りよじゅん}旅順や^{ほうてん}奉天(現在の中国・^{しんよう}瀋陽)を^{せんりよう}占領して^{しょうり}勝利した日本は、「韓国」に対する^{しはいけん}支配権や^{みなみまんしゅうてつどう}南満州鉄道(満鉄)の^{けいえいけん}経営権などを^{かくとく}獲得した。

日本は、「日清戦争」と「日露戦争」の^{しょうりご}勝利後、大陸侵略の^{かくだい}拡大に^{ほんそう}奔走した。

1910年(明治43年)には韓国併合を行い、朝鮮^{ちようせん}総督府を置いた。

この^{ぜんねん}前年に、首相を務めた^{つと}「伊藤博文」が中国・^{いとうひろぶみ}ハルビン^{えきとう}駅頭で韓国の^{どくりつうんどうか}独立運動家・^{あんじゅう}安重根に^{こん}暗殺された。

《注・1945年8月に、朝鮮半島南部が「大韓民国(韓国)」となった》

◇「第一次世界大戦」◇

「日露戦争」後、ヨーロッパでは^{ていこくしゆぎこく}帝国主義国の^{たいりつ}対立が^{ふか}深まった。

1914年(大正2年)、バルカン半島から始まった戦火は、「ドイツ」、「オーストリア」、「イタリア」の^{どうめいこく}「同盟国」と、「イギリス」、「フランス」、「ロシア」の^{れんごうこく}「連合国」との戦争に^{かく}拡大した。^{ぜん}全ヨーロッパを^ま巻き込んだ史上^{しじょうくうぜん}空前の「第一次世界大戦」となった。

日本は、^{にちえいどうめい}日英同盟を理由に「連合国」側に加わり、^{がわ}東アジアにおける^{ひがし}諸権利を^{しよけんり}強化し、その^{ちい}地位を^{かくほ}確保しようとした。

1915年(大正4年)、日本政府は「中国(清朝)」の^{えんせいがい}袁世凱政府に対し、「山東省」の^{さんとうしやう}ドイツ利権の^{りけん}継承など「二十一^{かじよう}ヶ条の^{ようきゆう}要求」を^つ突き付け、^{だいぶん}大部分を^{しょうにん}承認させた。

この戦争をきっかけに日本経済は^{まんせい}慢性的不況を^{だつ}脱し、^{こうけいき}好景気を^{むか}迎えた。

①日本が^{せんじよう}戦場にならなかった。②戦争で^て手いっぱい^{せいおうれつきやう}の西欧列強に代わって^{ちゅうごく}中国市場を^{どくせん}独占した、③全世界に日本^{ぜんせかい}商品を^{しょうひん}売り込んだ、などが^{よういん}要因だった。

しかし、^{たいせんけいき}大戦景気は^{ながつづ}長続きしなかった。^{べいか}米価などの^{ぶつ}物価が高騰し、^{こうとう}都市労働者や^{としろうどうしや}婦人が^{ふじん}米屋などを^{しゅうげき}襲撃する「米騒動」が^{こめさうどう}自然発生的に^{しぜんはつせいてき}広がった。

内閣^{ひはん}批判が高まり、1918年(大正7年)、首相は^{りつけんせいゆうかい}立憲政友会の^{そうさい}総裁「^{はらたかし}原敬」になった。「原敬」は^{かぞく}華族でも^{はんぱつしゅつしん}藩閥出身でもない、国民に^{えら}選ばれた^{へいみんさいしやう}衆議院議員の^{かんげい}平民宰相として^{かんげい}歓迎された。

「第一次世界大戦」は 1918 年(大正 7 年)、日本も加わった「イギリス」、「フランス」、「ロシア」の「連合国」側の勝利に終わったが、1 千万人近い死者と数千万人の負傷者を出した。翌年、パリで講和会議が開かれ、ヴェルサイユ条約が調印され、「ドイツ」はすべての植民地を失い、日本は「中国」にあった「ドイツ」の権益を継承した。

国際平和と民族自決の機運が高まり、1920 年(大正 9 年)、国際平和維持機関として「国際連盟」が設立され、日本は常任理事国になった。

この間、世界的な民主主義の風潮を受け、1916 年(大正 5 年)に「吉野作造」が民本主義《「主権は国民のためのもの」という考え方》を提唱し、国民の間に政治の民主化を求める声が高まった。1925 年(大正 14 年)に普通選挙法が成立し、満 25 歳以上の男子に衆議院議員の選挙権が与えられた。

こうした民主化の動きを「大正デモクラシー」という。

◇「満州事変(九・一八事変)」と「日中戦争」◇

「第一次世界大戦」の終結によってヨーロッパ諸国の復興が進み、ヨーロッパの商品がアジア市場に再び出るようになると、日本は不景気になった。

一方、「満州」や、植民地の「台湾」、「朝鮮」で抗日運動が激しくなった。

これに対し、国内では一部の軍人などが「満州は日本の生命線である」と主張。国民生活の行き詰まりを、中国侵略で打開しようとする動きが強まった。

1931 年(昭和 6 年)、日本軍(関東軍)は、満州で南満州鉄道爆破事件を起こし、これを中国軍の仕業として軍事行動を開始した。「満州事変(九・一八事変)」である。

翌年、日本軍は「満州国」をつくり、日本政府もこれを認めた。これを契機に、政党政治打倒を目指す軍部や国家主義革命勢力が急速に台頭した。

日本は 1933 年(昭和 8 年)、「国際連盟」を脱退し、国際的に孤立していった。

日本軍は 1937 年(昭和 12 年)、北京郊外で中国軍と「盧溝橋事件」を起こし、日本が「中国」を侵略する「日中戦争」が始まった。12 月には、日本軍は南京を占領し、「南京大虐殺事件」を起こした。日本軍は残虐な手段で、非戦闘員の婦女子を含む 30 万人前後の中国人を殺害した。

1938 年(昭和 13 年)には国家総動員法が制定され、経済も国民生活も政府の統制下に入った。日本は石油などの資源を求めるため、東アジアのほぼ全域を勢力圏とする「大東亜共栄圏」を目指したが、「アメリカ」、「イギリス」など列強による対日経済封鎖を招いた。

◇「第二次世界大戦」◇

ヨーロッパでは、「ドイツ」と「イタリア」が手を結び、「イギリス」、「フランス」、「ソ連」などの「連合国」と戦争を始めていた。1939 年(昭和 14 年)9 月に、「ドイツ」が「ポーランド」に侵入、「イギリス」、「フランス」が「ドイツ」に宣戦布告し、「第二次世界大戦」が勃発した。

日本は、「ドイツ」、「イタリア」と「日独伊三国同盟」を結び、一方、「連合国」に「ア

アメリカ」が加わった。「第二次世界大戦」は、「日・独・伊」と米・英・仏・ソ連などの「連
合国」との世界的規模の大戦争に発展した。

「アメリカ」は日本の対外侵略を阻止するため経済制裁を加えた。

日本はこれに危機感を募らせ、軍部は戦争に打って出た。

「東条英機」内閣は1941年(昭和16年)12月8日、「アメリカ」ハワイのパールハー
バー(真珠湾)を奇襲攻撃し、「アメリカ」、「イギリス」に宣戦を布告した。

日本は「日中戦争」と並行して「太平洋戦争」に突入、戦時態勢を一段と強化した。

1943年(昭和18年)、大学・高等専門学校(こうとうせんもんがっこう)の文科系学生を陸海軍に召集する「学徒出
陣」が行われた。

翌年には「学徒勤労令」が公布され、中等学校以上の学生・生徒を働かせる「学徒動
員」が実施された。未婚の女子を女子挺身隊として軍需工場等に配置した。この時期、数
十万人の朝鮮人や占領下の中国人を日本に連行して、鉱山などで働かせた。さらに、
日本軍は「朝鮮半島」、「中国」、「フィリピン」などの女性を戦地へ連行し、軍の慰安所で強
制的に働かせた。強制連行や「従軍慰安婦問題」は日本の歴史に大きな汚点を残した。

1943年(昭和18年)、アメリカ大統領・ルーズベルト、イギリス首相・チャーチル、
中国国民党政府主席・蒋介石がエジプトのカイロで会談、「日本に対する徹底的攻撃」を
決めると同時に、「第一次世界大戦後に日本の委任統治領となっていた南洋諸島の奪還」、
「満州、台湾、澎湖諸島の中国帰属」、「朝鮮の独立」などを決めた「カイロ宣言」を行な
った。

「連合国」側の反攻が激しさを増し、戦局は次第に日本に不利となった。

「日独伊三国同盟」の「イタリア」がまず降伏し、「ドイツ」も1945年(昭和20年)5
月に無条件降伏し、日本は孤立した。7月には、「アメリカ」、「イギリス」、「ソ連」の三国
首脳が「ドイツ」ベルリン郊外のポツダムで会談、「日本軍隊の無条件降伏」と「日本の戦
後処理方針」について勧告する「ポツダム宣言」を、「アメリカ」、「イギリス」、「中国」
の三国の名で発表した。

日本の敗戦は誰の目にも明らかだったが、日本は最後まで戦いをやめなかった。

1945年8月、アメリカ軍は日本との戦争を終結させるために、広島市と長崎市に世界最
初の原子爆弾を投下した。(被爆後5年間に、広島で20万人、長崎で14万人以上の市民が
死亡した)。

8月8日には、「ソ連」も日本に宣戦し、日本は8月14日、「ポツダム宣言」を受諾した。

翌8月15日、昭和天皇はラジオで戦争の終結を国民に告げ、4年にわたった太平洋戦
争は終了、6年間の「第二次世界大戦」も終わった。この大戦は死者4千万人以上、負傷
者1億人以上に上る大きな惨害をもたらした。

この年、アメリカ・サンフランシスコで開かれた「連合国」側によるサンフランシスコ会
議で国際連合憲章が定められ、10月に51カ国が参加して「国際連合(国連)」が設立され
た。

◇「日本国憲法」と「国際社会への復帰」◇

敗戦で日本は軍部による政治支配が終わった。

「アメリカ」のマッカーサー元帥を最高司令官とする「**連合軍総司令部(GHQ)**」の占領政策によって、日本の民主化が始まった。

1945年(昭和20年)12月以降、労働組合の結成、婦人参政権を認めた選挙法の制定、財閥解体、「6・3・3・4」の新しい学制(小学校6年・中学校3年・高等学校3年・大学4年)の発足、農地改革などの民主化が進められた。

日本の民主化に最も重要な意味を持つのが、1946年(昭和21年)11月3日に公布され、翌年の5月3日に施行された「日本国憲法」だ。

「日本国憲法」は戦前の「大日本帝国憲法」と根本的に異なり、「主権在民、基本的人権の尊重、戦争放棄」が三原則だ。さらに、天皇は「日本国民統合の象徴」として政治的中立の地位になり、衆議院と参議院の二院制の国会が「国権の最高機関」と定められた。

1952年(昭和27年)、7年間続いた連合軍による日本占領は幕を閉じた。

1956年(昭和31年)に、日本の「国際連合(国連)」への加盟が認められ、国際社会への復帰を果たした。

◇「日米同盟」が基軸◇

日本は1951年(昭和26年)10月、「アメリカ」のサンフランシスコで開かれた講和会議で、「アメリカ」を中心とする48カ国と「サンフランシスコ平和条約」を結んだ。

1951年の「サンフランシスコ平和条約」調印と同じ日、日本は「アメリカ」との間で「日米安全保障条約(日米安保条約)」を結び、日本国内へのアメリカ軍の駐留を認めた。さらに1960年(昭和35年)に、日本の防衛力強化や日米経済協力の推進などを内容とする「新日米安保条約」に改定した。学生を中心に、条約改定に反対する激しい「安保闘争」が展開されたが、6月に批准された。

第二次世界大戦後の世界は、超大国である資本主義・自由主義陣営の盟主・「アメリカ」と、共産主義・社会主義陣営の盟主・「ソ連」の対立、いわゆる「東西冷戦」が1991年(平成3年)まで続いた。そうした中で、日本は一貫して「日米同盟」を基軸とし、「日米協調路線」による外交・安全保障の道を歩んでいる。

◇「日本」と「アジア」◇

1950年の朝鮮戦争で、「米国」と「中国」(中華人民共和国)の関係が悪化し、日本は1952年に「台湾」を選択し、日華平和条約を締結した。

日本では、「台湾」に好意的な親台派の力が強く、「東西冷戦」下で、「中国」に対して嫌悪や不信感を抱く日本国民が少なくなかった。

しかし、自民党の田中角栄氏が1972年7月に首相に就任すると同時に、自筆の「親書」を密かに毛沢東主席(当時)に届けるなど、国交回復へ向けた行動を起こした。その年の

9月、周恩来^{しゅうおんらいそう}総理の招待^{しょうたい}で田中首相^{ほうちゅう}が訪中^{れきし}、歴史的な日中首脳会談^{にっちゅうしゅのうかいだん}が実現^{じつげん}し、9月29日、両首脳^{りょう}が「日中共同声明^{きょうどうせいめい}」に調印^{ちよういん}した。日本はそれまで国交^{こつこう}のあった「台湾^{だん}」に断交^{つうこく}を通告^{つうこく}。1978年（昭和53年）8月に、「日中平和友好条約^{へいわゆうこう}」が調印された。

アジアでは、1965年（昭和40年）に「韓国^{かんこく}」と「日韓基本条約^{にっかんきほん}」を調印^{ちよういん}するなど、アジアの隣国^{りんこく}との友好増進^{ゆうこうぞうしん}に努^{つと}めている。

一方、大国「ロシア（ロシア連邦^{れんぽう}）」との間^{あいだ}では、北海道^{ほっかいどう}の東^{ひがし}に位置^いする北方四島^{ほっほうよんとう}（歯舞諸島^{はぼ}、色丹島^{まいしよとう}、色丹島^{しこたんとう}、国後島^{くなしりとう}、択捉島^{えとろふとう}）の帰属問題^{きぞくもんだい}が解決^{かいけつ}していないため、「日ロ平和条約^{にちろへいわ}」は2016年時点^{じてん}で、まだ締結^{てん}されていない。

